

大学レポート 2011

大学進学率、大学生数、授業出席率、就職先人気企業など様々なデータを用いて、保護者の世代と現代の大学生とで大学や大学生がいかに変化したのかを解説します。さらに、今注目の大学にうかがい、「教育改革」や「キャリア教育」にどう取り組んでいるのかをレポートしました。

教育改革 Educational Reform

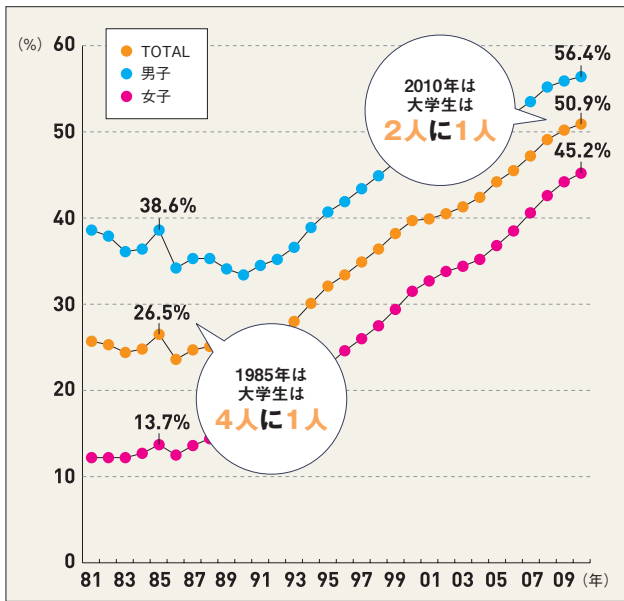
- 神奈川大学 p.26
- 広島女学院大学 p.28
- 明海大学 p.30

キャリア教育 Career Education

- 専修大学 p.32
- 東京家政大学 p.34
- 東京農業大学 p.36

大学レポート University report

【図1 大学進学率】25年間でほぼ倍増



過去(1985年ごろ)と
現在(2010年)のデータから
大学の变化が
実感できます

男女トータルは、1985年から2010年までに1.9倍になった。男子が38.6%から56.4%と1.5倍になったのに対し、女子は13.7%から45.2%へと3.3倍の伸び。
出典：文部科学省「学校基本調査」(平成22年度)※過年度高卒者等を含む

大学生数、大学数ともに
大幅に増加

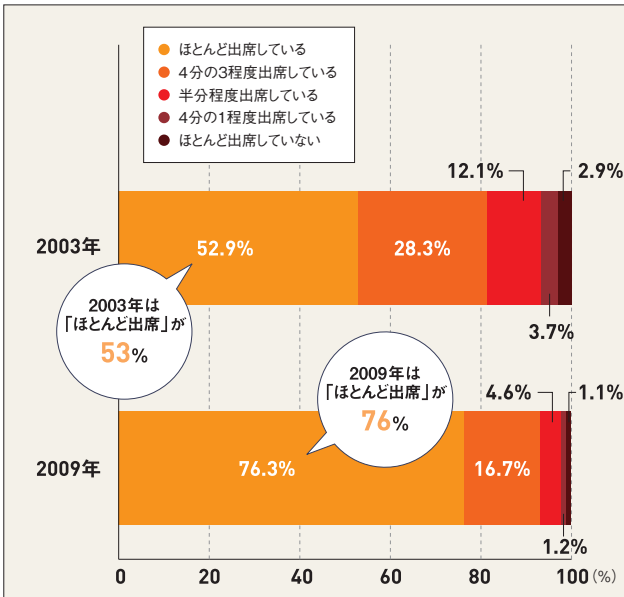
最近の大学生の問題を指摘する時、「まったく近頃の大学生は」といったフレーズが使われます。その際に忘れがちなのは、同じ「大学生」といつても、昔と今ではその中身や構成が大きく異なるところ。その変化を探るために、40代半ばの人が学生時代を過ごした1985年ごろから現在までのデータを順に見ていきましょう。

まずは大学進学率(図1)。ご覧のように85年から10年の25年間にほぼ倍増しています。さかのぼれば1960年代には10人に1人だった大学生が、85年ごろには4人に1人となり、今や2人に1人。大学生の社会におけるポジションは、時代とともに変化しているということを保護者も理解しておきたいものです。

学生数も同様に85年から10年の25年間で100万人以上増加しています(図2)。大学進学率、大学生数とも、男子よりも女子の増加率が著しいことがグラフの傾きから明らかだと思います。

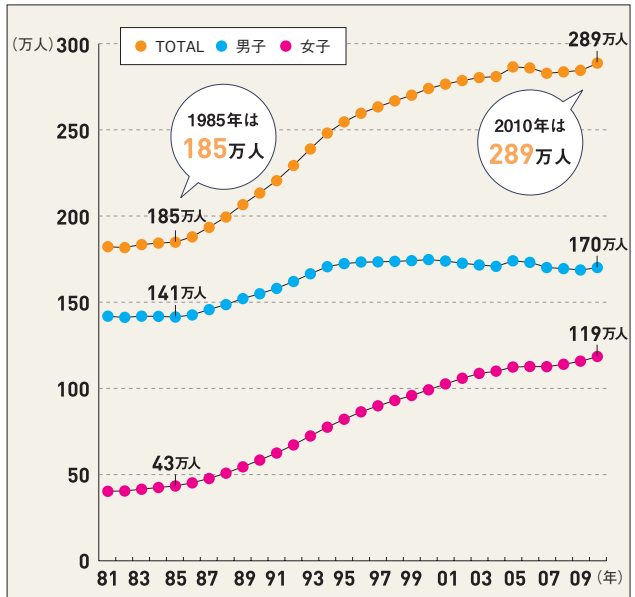
大学生が増えた要因は、大学が増えたことです。図3のようにこの25年間で大学は300校以上増加。その8割以上を私立大学が占めています。

[図4 授業出席率] ここ6年間でも出席率は急上昇



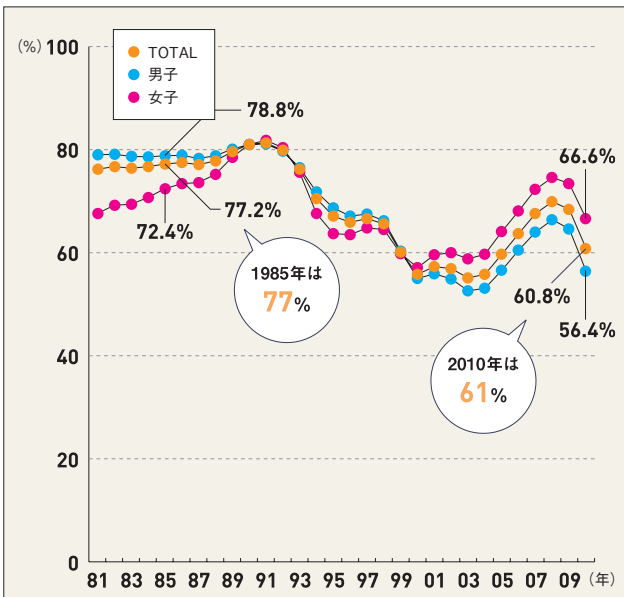
関西大学が昭和30年から実施している学生生活実態調査からの抜粋。03年と09年の比較だが、この6年という短い間にも大学生の生活や意識が変化していることがうかがえる。
出典：関西大学「平成21年度学生生活実態調査」

[図2 大学生数] 女子は2.7倍に



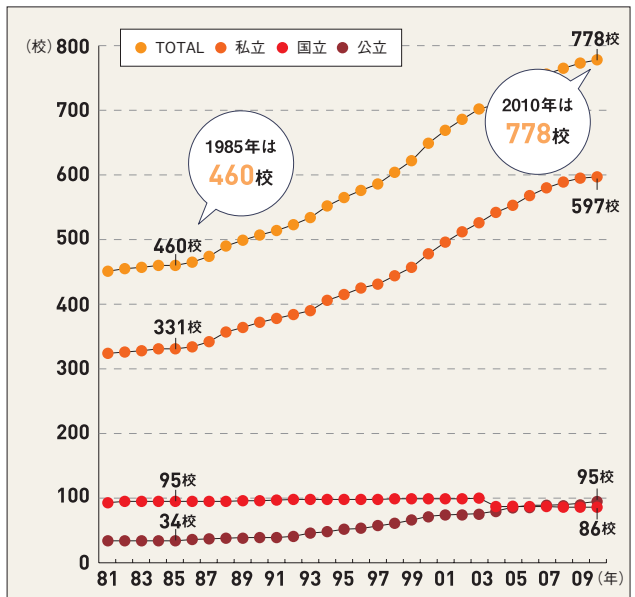
大学進学率同様、女子の伸び率が激しい。85年の43万人から10年には119万人へと2.7倍に。一方の男子は1.2倍、男女トータルでは1.6倍となった。
出典：文部科学省「学校基本調査」(平成22年度)

[図5 大卒就職率] 不景気で前年より7.6%減



就職者数÷卒業者数がこの定義。09年と10年を比較すると、大卒就職者数は約38万人から約33万人に、就職率は68.4%から60.8%へと激減した。
出典：文部科学省「学校基本調査」(平成22年度)

[図3 大学数] 300校以上も増加



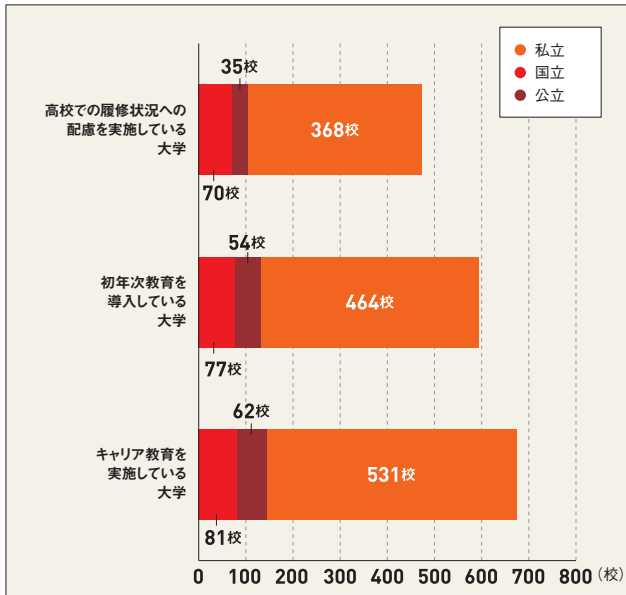
トータルはこの30年間ほど漸増している。増加率を見ると公立大学がもっとも高く、85年の34校から10年には95校と3倍近い伸び。国立大学は、逆に減少している。
出典：文部科学省「学校基本調査」(平成22年度)

「社会的・職業的自立」が今後の大学の課題

大学生が社会の変化に最も大きく影響を受けるのは就職ですが、就職率はそれをはつきりと表しています(図5)。「バブル景気」といわれた86年(92年ごろは企業より大卒者が優勢な「売り手市場」で、就職率も80%前後で推移しました。しかし、バブルがはじけた93年以降の「就職氷河期」は70%台から60%台へ、さらに50%台へと減少。その後70%近くまで盛り返したものの、08年の「リーマン・ショック」の影響で09年68%から10年61%へと大幅ダウン。いつから上向くのか、先行

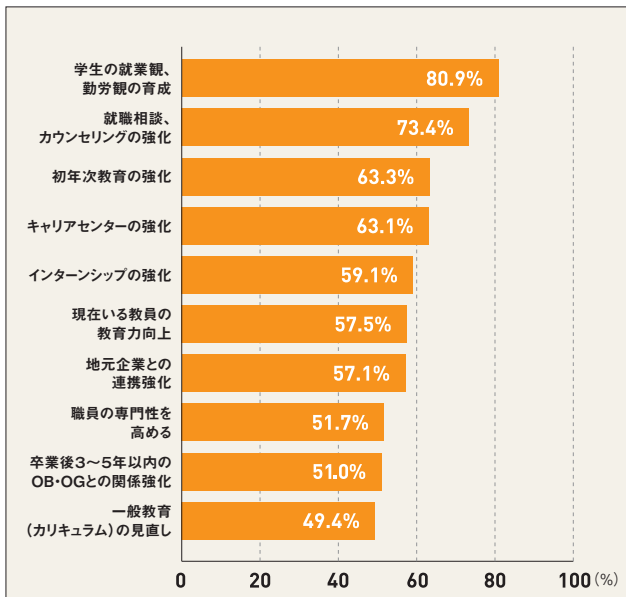
授業に出ないことが大学生の「特権」だったり、「勲章」のような時代がありました。しかし、最近の様変わりしています。現代の大学生ははじめに「なつた」という話を方々の大学で聞きますが、それを示しているのが図4の関西大学の調査。「ほとんど出席している」が03年の53%から09年には76%へと大きく増加。09年は「ほとんど出席」「4分の3程度出席」を合わせると93%にも達します。80年代や90年代のデータがなく比較できないのが残念ですが、今の大学生のまじめぶりを明白に示すデータといえるのではないのでしょうか。

[図7大学教育改革] キャリア教育実施校が9割も



大学院大学や学生募集を停止した大学を除く、08年度の全747大学を対象とした文部科学省の調査結果。全国的に教育内容の改善に努める大学が多い。
 出典：文部科学省「大学における教育内容等の改革状況について」(平成20年度)

[図8就業力育成の対策] 就業観、勤労観の育成が急務



大学生に就職する力をつけるために全国の大学学長が重要と考える取り組みの上位10項目。教育内容の改革や組織変革、企業や卒業生との連携など、大学の総合力が試される時代だ。
 出典：株式会社リクルート「就業力育成に関する学長調査」(2010)

きはいまだ不透明です。就職先の人気ランキングも時代とともに変わります(図6)。85年のランキングには大手メーカー、総合商社、都市銀行といった日本の屋台骨を支えてきたマンモス企業が顔をそろえました。一方の10年ランキングでは、そうした企業も依然人気の高さを示しているものの、レジヤ、食品、IT、ブライダルといった新鮮な顔ぶれも並んでいます。最近では就職活動の厳しさや、就職してもすぐに離職してしまうといった問題のほか、大学に馴染めない学生や勉強についていけない学生、勤労観に乏しい学生など、課題を抱える大学生が増えたといわれています。そこで大学側も様々な取り組みをスタート。大学教育への移行をスムーズにする「初年次教育」や、将来の職業生活を視野に入れた「キャリア教育」を導入する大学は年々増えています(図7)。

今年度から大学で「社会的・職業的自立に向けた指導等(キャリアアゲイダンス)」が義務づけられたこともあり、これらの教育が今後ますます充実することは間違いありません。大学の学長アンケートでも、学生の就業力育成のために、大学が今後いろいろ試みしようとしていることがわかります(図8)。次ページからの大学レポートで、各大学の具体的な取り組みをさらに詳しくご覧ください。

[図6就職先人気企業] 25年間で顔ぶれが変化



85年は男子データのみ、10年は男女データであることなど調査の条件は若干異なり、単純比較はできないが、顔ぶれから時代の変遷は感じ取れる。
 出典：株式会社リクルート(1985年は「大学生男子の人気企業調査」、2010年は「就職ブランド調査2010」)